

水^{すい}靴^かと少年

神津 キリカ

遠く陽炎の中に、それは現れた。
背にひととき大きなこぶをこしらえた、砂色の四足の獣の上に、大きな笠をかぶり、成りの木綿の衣に身を包んだ男が座している。その装いは、照りつける陽光を凌ぐためだった。彼は、獣のゆったりと沈み込むような歩法に、身を委ねていた。
男の後ろには、たくさんの荷を背負った四つ足の獣が十頭、間をおいて結ばれた縄目のように連なっている。しんがりには、先頭の男を写したような姿が二つ、同じようにゆらゆらりと、めいめいの獣の背に揺られていた。
獣の足が踏みしめるは、一面の青の砂漠。そよぐ風とたゆたう潮が、その紋様を刻一刻と描き直していく中、一步、また一步、確かめるように波間を進む。

「来た、来たぞ」

西の海を望む海辺の丘、その天辺にそびえる、子どもたちからアラミナと呼ばれている大木は、四方八方に手を伸ばすかのように、太くごつごつした枝を見境なく生やしていた。家の梁のように太い横枝には、少年が二人、海を眺めながら座っていた。ねんじゅう日に焼けっぱなしの肌色をした少年は、ぶらつかせていた足を止めると、そこが木の上であることを忘れているかのように跳び上がり、枝の上に立った。

「隊商だ！」

傍らに座る、丈の長い草のような少年に教えるように、ずっと遠くの海を指差す。隊商の列は、群青色と翠緑色を分かち白波を踏み越えて、珊瑚礁の内に入るところだった。

「行こう！」

「ちよっと待って、マンダ」

マンダと呼ばれた色黒の少年は、横枝を駆

けだした。枝が下へと曲がるところで大きく跳ぶと、まだ細くて柔らかい若枝をつかみ、たわむ枝に導かれるまま、下へ下へと降りていった。枝を放してつかの間、彼は蜜蜂のようになり、アラミナの幹にしがみつくと、そのつややかな樹皮を滑るようになり、地面へと降り立った。

「なんだよ、遅いぞ」

マンダは木の上を見上げた。もう一人の少年は、彼らが座っていた枝から、ようやく一本下の太い枝に、おそるおそる足をついたところだった。

待ってくれよと乞う彼を、マンダは足踏みしながら見上げていた。が、すぐに堪えかねた様子で「追いかけてこいよ」と声を張り上げると、ひとり、丘の左脇、ずっと下の方に見える浜辺に向かって走り出した。

マンダが浜についたときには、すでに島の大人達が、隊商を迎える用意を済ませていた。

上陸点を示す黄色い大旗の周りには、隊商の獣のための大きな水桶が置かれ、湛えられた真水は陽にきらめいていた。大人達の声にも、心なしか弾むような色を、マンダは感じ取っていた。

しばらくすると隊商の姿はぐっと近づき、その獣の歩みまでがはっきりと見えてきた。マンダは、獣が履いている、黒い靴のようなものをじっと見つめていた。獣の足が水面を踏みしめると、その足下にはわずかなくぼみができ、ささやかな波紋が浮かびあがる。彼らは、水面を往く隊商だった。マンダにとってその様子は、何度見ても不思議なものだった。そして、同じように海の上を歩いてみたいとも思っていた。

島の人々の歓迎の歌の中、波打ち際から上がった獣たちは、次々と砂浜へしゃがみこみ、その身を休めていた。灼けた砂浜で熱くないのだろうか、マンダは感心していた。

「遠くからこの島までよう来られた。商衆あきないしゅうの

方々

シマオサのカダは、降り立った大笠の男の手を握ると、合図して、木の器になみなみと注いだ水を持ってこさせた。男は渡された杯を一気に飲み干すと、一息ついて、爽やかに笑った。すぐ後ろに伏している獣は、長い睫毛をした瞳で、その様子をうらやましげに見ているようだった。

「今年は、マナキ殿はおられないのか」

「彼はいま、北の島々への旅路に就いています。私、ジャガラが名代として、祭りに欠かせぬ品々を持って参りました。市は今夕に開くことでよろしいですか」

「慣わしのおり、そのように。それまで、磯洞の小屋にてお休みくださいませ」

商人のジャガラは頷くと、二人の若い男に合図をし、崖を背に立つ小屋のほうへ歩いて行った。

島の者達は、隊商の訪れを心待ちにしていた。彼らは、年に二度の祭りの前にやってくる

る。彼らの売り物には、祭りに欠かせぬもの他に、珍奇な異国の品々もあつた。男達は銛や色鮮やかな疑似餌などの漁具を、女達は大陸独特の柄の土器や木器を好んだ。珠でできた首飾りや、簪かんざしのような装身具は、性別によらず人気があつた。隊商の来訪を以て、島は祭りの賑わいの中へと身を投じていくのだった。

マンダは、木の上で一緒だった少年とふたりで、四つ足の獣が履いている靴を間近で見ている。よく見ると、それは木でできた靴で、脱げないように何重にも革紐でくくられていた。表面は黒く艶のある塗装で、少しの剥げも見当たらなかつた。その上には文字とも柄ともつかぬ、白い紋様が描かれている。ほこらで見た符の柄を、マンダは思い出していた。

「これが水靴すいかかあ」
「どうしてこんなので水の上を歩けるんだろ
うな、わかるか、マンダ」

首をかしげて聞く少年に、マンダはかぶりを振って応えた。素材が木だから、丸木舟のように水に浮くのだろうかと考える。だが、商人たちが座っていた背中あたりでさえ、マンダたちの背丈をゆうに越しているこの大きな獣を浮かべるには、小さすぎるようにも思えた。

「何をしている」

後ろから急にかけられた声に、二人の少年は身を縮ませた。振り返った先には、カダが立っていた。

「おんじい、驚かすなよ」

マンダはシマオサ、そして祖父でもあるカダに向かって、眉根を寄せた。

カダは水靴かと呟くと、マンダの首根っこをがっしりと掴み、籐とうの籠のように軽々と持ち上げた。カダはもう齢六十になり、結った長髪には白髪の房が目立ち、長年の日焼けが堆積したような色黒の顔には皺も目立つが、体つきからは歳を感じさせぬほど、筋骨逞し

い男だった。

「お前が気にすべきものではない。向こうへ行け」

「なんだよ、見るぐらい」

つまみ上げられたままのマンダは、口をとがらせた。

「ならん。ならんと言ったらならんのだ」

もう一人の少年は、カダの峻厳な声に恐れをなして、そそくさと立ち去っていた。気づいたマンダは、彼を横目に見て鼻を鳴らした。臆病者めと、声に出さず毒づく。

「あなた、ちよっと」

そこに、マンダにとっての助けが現れた。カダの妻であり、マンダの祖母でもあるカララがやってきた。

「今度はなにをしでかしたの？」

カララは、普段は細めたままの目をまるまると開けていた。

「まだなにもしてないよ」

マンダは体を揺すって、祖父の理不尽を訴

えた。カダは、マンダが掟に反する水靴をまじまじと眺めていたことを見咎めたのだと言う。「それぐらいなら、許してあげればいいじゃないですか」と、のんびりした声音で、カララはマンダをかばった。

マンダには両親がいない。父も母も、かつて舟で海に出たまま行方知れずになってしまっていた。それゆえマンダは、母方の祖父母であるカダとカララとともに住んでいた。家だろうが表だろうが、変わらず厳しい祖父とは対照に、祖母はかならずマンダの味方をしてくれた。

カダの厳つい手の力が、少し緩んだ。マンダは大きく体を揺り動かすと、カダの手から逃れた。

「おい、マンダ！」

掴み直そうとする祖父の手をかいくぐって、マンダは走って逃げ出した。

おんじいが怒るのなら、目の届かないところで見るまでだ。マンダは、商人達が一息つ

いているはずの小屋へ走って行く。商人も皆、水靴を履いていた。

「これが、人の履く水靴ですか」

「なんだ坊主、そんなに珍しいか」

とぼ口に脱ぎ揃えた水靴を、生まれたての獣の子でも眺めるようにしているマンダを、商人のジャガラは微笑ましく見ていた。

「この島には、水靴がないんです」

ほう、とジャガラは思案の表情を浮かべ、そういえばそうだと呟いた。

「おんじいが、いや、シマオサが禁じているんです」

「今日時分、珍しい島だ。今や水靴は、海の民に欠かせぬものだというのに」

同意して何度も頷くマンダの肩に、ジャガラは手を置いた。マンダの目は、置いてある靴に釘付けのままだった。

「坊主、履いてみたいか」

思いがけないジャガラの言葉に、マンダの

目が輝いた。

えっはい、と、マンダは素っ頓狂な大声を上げた。板の間で横になっていた二人の若者はその声に叩き起こされ、不機嫌そうな顔をした。

「よし、履き方を教えてやる。草履はそこに脱いでおけ」

ジャガラは、寝ぼけ眼の丁稚に指示すると、積んであった荷箱から、新品の水靴を持ってこさせた。大きさは、マンダの足には少し大きいくらいだった。

黒光りした真新しい靴に映った自分の顔を、マンダはじつと見つめていた。よく見ると、文字のような白い紋様は、靴に彫り込まれていた。その凹凸を、マンダは指先でそつと撫でた。触れたところが、うすぼんやりと光ったようにも見えた。

「この模様は？」

「これが、水の上で歩けるようになる要よ。俺もしくみはよく知らんが、我々の足でも何

ヶ月とかかる、はるか西の国に、昔、水の上を歩いた奴がいたそうだな。それをもとにして、伝わったと聞いている」

マンダは、話に聞いたことのある大陸よりも、ずっとずっと先の西方を思い浮かべようとした。だが、何ヶ月も旅をするという感じじたいがわからなかった。

「これは小さめだが、大人用だから少し緩いだろう。足に布を厚めに巻いて、隙間を詰めよう」

ジャガラは、砂ぼこりだらけのマンダの足を拭いてから、厚手の布を巻きはじめた。巻いては締め、巻いては締めを繰り返していく。ふくらはぎが圧迫される感覚も、期待に胸躍るマンダにとって心地よかった。

「いいだろう、足を入れてみる」

確かめるようにジャガラの目を見たマンダは、ジャガラが頷くのを見て、足を水靴に差し入れた。ぴったりだった。

「そうしたら、こうやって結ぶんだ」

水靴に通してある長い紐を、靴を絡げるように巻いていき、それでもまだ大人の腕ほどの長さが余らせてある分を、足首へと巻き付けていく。足に巻いた布は、靴紐との擦れを防ぐ役目もあった。

「よし、立てるか」

ジャガラが差し出した手をマンダは掴む。だが、ほとんど助けなしに、自分の力で立ち上がる事ができた。少しだけ背が高くなつたような気がした。

マンダはその場で足踏みをしてみる。布を詰めて履いているものの違和感はない。固い履き心地ではあったが、足と一体化しているような感触だった。

「どうだ、坊主」

「びったりだ」

ジャガラから歩いてみると言われ、マンダは一步、踏み出してみる。床板に靴が当たり、こつんと音を立てた。二歩、三歩と足を進める。ここは小屋の中だったが、マンダの想像

の中では、足下に一面の海が広がっていた。彼の一步ずつ確かめるような歩き方は、すぐに普段どおりになり、十歩ほどでもう小走りに変わっていた。喜びを隠せずに跳ね回るマンダを、商人達は微笑ましく眺めていた。

ジャガラは立ち上がると、勢いのついたマンダを両手でしっかりと押さえて、彼の前にしゃがんだ。

「気に入ったか」

「はい！」

「そうか、それなら、これはお前にやろう。なに、金も換えの品もいらんよ」

マンダには、ジャガラの言葉の意味をかみ砕くのに時間がかかった。だがすぐに晴れ晴れとした顔で、「ありがとう、おじさん！」と、大げさなぐらいに頭を下げた。

「おじさんじゃない、ジャガラだ。葦切よしきりの商衆のジャガラ。坊主、お前は」

「マンダです」

そうかと言って、ジャガラはマンダの頭を撫でた。
「マンダ、靴をあげるかわりにひとつ、頼まれてくれないか」
目を丸くしたまま、マンダは首を縦に振った。ジャガラは言い含めるような眼差しをして、言った。
「島の皆に、これの良さを知らしめてほしいのだ。禁じられていようと、皆が望めばシマオサも折れざるを得まいよ」
島の皆が水靴を履き、海の上を自由に歩き回る風景を、マンダは思い描いていた。なんて楽しそうなんだろう、と。それに、とても便利なはずだ。魚を獲るのも、沖の小島に行くのも、この靴があれば、自分だけでできるのだ。それにもしかしたら、他の島まで歩いて行けるかもしれない。
「わかりました、みんなに教えます！」
「うまくやるんだぞ、マンダ。シマオサが禁じているのだから、はじめのうちはこっそり

とな。履いてもいいが、目立つ場所ではだめだ」

「わかりました」

「俺たちはもう明日の朝には島を出る。次の島に行かなくてはならないからな」

「そうなんですか」

「ああ。だがまた来年、俺か、あるいは他の商人が来るだろう。そのときには、水靴がいっぱい売れるようにしておいてくれよ」

ジャガラの顔は、大人からすれば、胸に一物あるような笑みに見えただろう。だがマンダはそれを素直に受け止めていた。

マンダは丁稚が持ってきた麻袋に、水靴を大事そうにしまった。彼はジャガラに深々と礼をすると、麻袋を胸元に抱きしめて、手を振りながら颯爽と駆けだしていった。

祭りの夜がやってきた。

日が傾きはじめるとともに、島じゅうの

人々は、最も大きく海に近いダダリの集落へ、祭歌を口ずさみながら、続々と集まっていく。島の催しのほとんどは、三つある大きな集落が持ち回りで担うこととなっている。ただ、年に一度のこの祭りだけは、島の中心地であるダダリで行うと決められていた。マンダはたったひとりで、ダダリから丘をひとつ越えたところにある海岸へと向かっていた。明かりとなる篝火^{かがりび}などは持っていないかったが、空に輝く満月が、彼の道行きを煌々と照らしていた。静寂の夜を、海からの風が浚っていく。夜に吹く湿り気を含んだ風が、マンダのお気に入りだった。祭りの夜は、友達と過ごすのが毎年のことだった。この日だけはどんなに夜更かししても大人に叱られることはないので、眠くて仕方なくなるまで、皆と遊ぶことができた。だが今年は、誰の誘いも受けることなく、水靴を持って海を目指すと決めていた。祭りの夜ならば、見つかることもなく、海の上を歩

いてみるのができそうだった。さすがに幼
馴染みのエナから誘われたときは、一瞬、決
意が揺らぎそうになった。が、マンダは後引
くものを感じながらも、彼女の招く手を押し
返し、祭りとは反対の方向へと駆け出したの
だった。

浜辺に着くと、マンダは周りをたしかめた。
人影はない。とても、静かだった。風も波も、
みな祭りへと出かけてしまったかのような風
だった。

マンダは思わず、わあっと、月に向かって
叫んでいた。声は響き渡ることなく、夜の海
に吸い込まれていった。

草鞋を脱ぎ、草木染めの衣を砂の上に置く
と、彼は目印にと、細長い流木を砂浜に刺し
立てた。そして、麻袋の中からうやうやしく、
水靴を取り出した。黒く艶やかな曲面が、円
い満月を三日月のようにひずませて映し出し
ていた。この黒光りする靴を見るたびに、マ
ンダは思わずにやついてしまふのだった。

外で水靴を履くのは、これが初めてだった。この間ジャガラに教わったとおりの手順で、マンダは靴を履きはじめた。靴を受け取ってから二晩、納屋に隠れて何度も練習したかいてもあつて、マンダは迷うことなく履くことができた。

靴は、手で抱え持っていたときよりも、ずっと軽く感じられていた。足下を見たマンダは、軽やかに足踏みをした。さくさくと、砂が鳴る。

マンダは、昼間のきらめくそれとは正反対の、闇に包まれた海を見つめた。夜の海は、やはり怖い。中天に登ろうとする満月をじつと、念押しするかのように見つめた。月明かりだけが、マンダの往く先を照らすのだ。

海を歩くときが、来た。

波に洗われて湿り気を帯びた砂を踏むと、靴の形に足跡がつく。前に進み始めて何度目かに寄せた波は、足下まで届く勢いがあった。波が足下に達した瞬間、マンダは靴の下に何

かが挟まるような感触を覚えた。そして、靴に刻まれた白の紋様が、うつすらと輝き出す。波をかぶったにもかかわらず、靴の表面には水一滴ついていなかった。引き波、そして次の波。マンダは波頭を飛び越えて、水の上に着地する。砂の上に足をついたように、わずかに沈み込む感触がするとともに、靴のふちから小さな水跳ねが起こった。足下は、水面の揺らぎに伴って傾いた。船の上にいるときと似ていると、マンダは思う。いま、水の上に立っている。マンダは口を開かぬまま、心の中で快哉を叫んでいた。一歩、二歩と足を出す。揺らめく海面をうまくいなしながら、沖の暗闇をじっと見据えて、マンダは歩いて行く。ふと、足をついたあたりが青白く輝いた。一瞬、靴の紋様からの光かと思っただが、ずっと強い光だった。足下の水中を泳ぐトモシビウオが吐く、光の靄もやを吐き出した。トモシビウオは、驚くと光る靄を吐

き出す。昔、夜の海で、おんばあのカララに
教えてもらったことを思い出した。
彼の歩みに合わせて、光の足跡が刻まれて
は、消えていく。光ることの愉快さ、そして
何よりも、海の上を歩くという念願がかなつ
た喜びから、マンダの歩みは、いつしか駆け
足へと変わっていった。まっすぐ、うねうね、
そしてまっすぐ。彼は思うままに、海面を蹴
立てて走った。陸で走るときと違い、着いた
足が離れるときに、押し出されるような力を
受ける。目に感じる潮風の強さから、マンダ
は陸よりもずっと速く、水の上を駆けている
のだと分かった。
ほどなく、珊瑚礁の際、巻き波が泡立つと
ころまでマンダは来ていた。そこから先は、
夜の海の黒さがぐっと深まっていた。珊瑚礁
に守られていない、海そのものが持つ荒々し
さを感じて、思わず息をのんだ。黒々とした
海の闇を前にして、マンダの足が引き返そう
と踵を返しかけた。そのときだった。

真正面の海の中に、光の泡が立ちのぼった。踏みしめたときの光とは比べものにならない明るさだった。島いちばんの大船ほどの広さに、燐光は広がっていく。何が起こるのかと、マンダは唾を飲み込んだ。嵐の風鳴りに似た轟音が、黒い海の底から迫ってくる。光の泡は盛り上がり、すぐ散りとなり、そのど真ん中、水面から何か飛び出した。思わず、嘆息が漏れた。月明かりに浮かんだ巨影の際を、払うように輝きが走る。それが銀鱗だと気づくのに、時間はかからなかった。バアラ。マンダは思わず、その名を口走っていた。巨魚を意味すると同時に、とある種類の魚じたいを指す、島の言葉だった。バアラが開けた大口から、青白い燐光がいくつもこぼれ落ちていくのを、マンダは見た。バアラは、トモシビウオを食べにきていた。

この季節、たくさんバアラが、島の周りに現れる。体の幅以上に広がる大口で、浅い海に浮かぶ魚を、海水ごと一気に飲み込むのだった。

彼も、三日間にわたる祭りを締めくくるバアラ獲りで、その姿を見たことがあった。大人五、六人を寄せて固めたぐらいはあるかという巨体に驚いたことを、よく覚えている。これほど間近で、バアラの跳ねる姿を目の当たりにしたことに、マンダは興奮を抑えきれなかった。

バアラの跳躍は、ノロガメの歩みのようにゆったりとした動きに見えていた。実際には、それは彼の二息か三息に満たない、束の間でしかなかったのだが。着水とともに拡がり散ったしぶきを総身に浴びて、マンダの時間はようやく、元通りの速さに戻った。

あさって、おんじいはあいつと戦うんだ。マンダは感慨深げに、バアラの潜った海面を見ていた。

バアラ獲りでは、シマオサがはじめの銛を突き立てると、ずっと昔から決まっていた。祖父よりも前にバアラの姿を見ることができ、マンダは誇らしげな気持ちだった。マンダははっとして、いま自分が水の上に立っていることを思い出した。体に浴びた水しぶきは衣をびっしりと濡らしていたが、水靴には一滴の残滓すらついていない。これが、水靴なのだ。バアラの到来で脇に退いていた喜びを、ふたたびマンダは嘖みしめた。海を歩けば、こんな景色にだって出会えるのだ。それにもう、自分の足で、海の上を進むことができる。この靴があればきつと、ずっとずっと東の海にあるというあの世、ニライにだって行けるはずだ。父^{ター}と、母^{アイ}も、そこにいるのだろうか。会えるのだろうか。涙は出なかった。けれど、喉の奥深くがざわめくような息苦しさを、マンダは感じていた。

マンダは、ひとりアラミナの木の丘にいた。
彼が見つめる先の海には、七艘もの竜頭船りゅうずせんが繰り出していた。浜辺から盛んに打ち鳴らされる鐘や銅鑼の音は、祭りがいよいよ最高潮に達したことを表していた。バアラ獲りがはじまったのだ。

木の幹に背を預けたままのマンダは、むしった草を手のひらに乗せると、短く息を吐いて吹き飛ばした。はらりと散る葉の切れ端の中で、マンダの吐息は溜息へと変わっていった。ゆつくりとマンダは立ち上がり、海がよく見える崖の際まで、のろのろと歩いていった。

バアラ獲りに伴う船に、子どもは乗ることができなかつた。マンダはまだ十三歳、この島で成人とみなされる十四歳までは、あと一年、待たねばならない。マンダも志願したが、案の定、おんじいに叱られて断念した。その

せいでこうして、遠くから見ているしかなかつた。海に出ない者たちはだいたい、浜辺の喧噪に入り交じり、歌い騒ぐのを好む。ただ、人よりも遠目の利くマンドは、ここで静かに、船が見事な陣を描いていくのを見るほうがよほど楽しいと思っていた。

船はみな、珊瑚礁の外縁まで漕ぎ進んでいった。手の込んだ装飾や彩色が施された船の群れの中、塗装もなく、木地そのままの小舟が一艘、中央にいた。舳先には一人の男が立っている。小舟同様に質素な生成りの貫頭衣を着た、祖父のカダだった。

カダは舳先で、大きく両手を広げた。六艘の竜頭船が、左右三艘ずつ、葉脈のように広がっていく。十数人の男達がいつせいに櫂を振り抜くと、竜頭船は水の上を一気に走り出した。しばらくして船々が円を描くように広がる。すると、乗り手の男たちは、臍から響くような雄叫びを上げながら、櫂で水面を叩き始めた。バアラを追い込みにかかっているのだ。

バアラは、餌になる小魚を求めて浅い海を泳ぐ。泳ぎは速いが、潜って逃げるといふことを知らないがゆえに、周囲に異変があると、その場で泳ぎ続けてしまうことがある。その習性を利用した漁だった。櫂が何十回と水面を叩いた、そのときだった。円陣の真中で、バアラが跳ねた。皆が目を見開いた。魚に吠え声はないが、マンダには、大きく開かれたバアラの口から、咆吼が聞こえるように思えた。浜も海も静まり、バアラが着水する音だけが、あたりに響いた。マンダも、思わず立ち上がった。大きい、と思った。おとといの夜に見たのよりも、ずっと。バアラ獲りの、はじまりだ。小舟は、一目散にバアラの跳ねた場所を指した。カダの舟には、カダのほかに三人しか乗っていない。二人は漕ぎ手、一人は舵。それにもかかわらず、十数人で漕ぐ竜頭船にも負けない速さだった。カダが手で合図し、

舵取りに指示を出す。カダの目には、バアラの場所がありありと見えているようだった。マンドは高い所から見ているが、バアラの魚影は、濃紺色の海と混ざり合って区別がつかなかった。

すると、カダは小舟の中から、人の背丈の倍ほどもあるような棒を取り出した。一年のうちでも、今日この日、バアラ獲りにだけ使われる長銚だと、マンドにはすぐにわかった。カダは右腕で銚を振り上げ、大きく引いて構え、その身を引き絞った弓のようにして静止した。瞬間、カダの全身は左肩を支点に躍動し、風切る速さで、銚が放たれた。銚の後ろでは、縄が小波のようにうねりながらついていく。誰もが声も上げず、飛び行く銚の行き先を見守っていた。

大銚の先端が海面に接してすぐに、バアラがふたたび、大きく海面から飛び上がった。船から、浜辺から、ざわめきが起こり、それは次第に歓声に変わっていった。マンドも思

わず、声を上げていた。

バアラは翻した身を海面に叩きつける。海の中へとその巨体が消えていき、銛から伸びる縄が一気に繰り出されていった。

そのとき、あたりを包む歓声が途絶えた。

マンダも、あっと声を漏らした。

カダの姿が、水中に消えた。

バアラに突き刺さった銛の縄が、カダの足を絡め取ったのだ。小舟からは、銛につながれた縄が繰り出され続けていった。縄の端を捕まえようとした舵取りの手は、空を掴んだ。

すべてが一瞬のことだった。

バアラの描く白い泡の線は、竜頭船の囲いを抜け、沖へと向かおうとしていた。恐ろしい速さだった。全速力の竜頭船でも、すぐに引き離されてしまうぐらいだった。

このままじゃ、おんじいが。

立ち上がったマンダの手には、おとといからずっと、後生大事に持っていた麻袋が握られていた。急いで取り出した水靴を、マンダ

は一瞬、願うような目で見つめた。

「おい、マンダ！」

浜辺を駆け抜ける彼の姿を認めた大人達は、どこへ行くつもりだと、口々に彼の名を呼ぶ。

「助けに行く！」

どこへ行くも何もない、おんじいを助ける。そのためにマンダは、海を駆けるのだ。

勘のいい大人は、彼の足下を見ると、緊迫した表情を浮かべた。なぜマンダがあれを。あれは、掟破りの水靴だ。

浜の砂は日射しに乾いているのに、足にまとわりつくようだった。水靴を履いた足にとっては、水面のほうがよほど素直だった。マンダは早く海に達したい一心で、砂に沈み込む足を前へ前へと繰り出した。渚が迫る。寄せる波に向かって大きく跳躍する。その瞬間、顔を撫でる風の暑さが消えた。

マンダは、踏みしめた一歩目が水面に弾か

れる反動を感じると、水平線の先へと飛び込めるぐらいに、体を前に倒した。走るんじゃない、跳ぶんだ。マンダはそう意識した。速い、すごく速い。おとといは夜闇の海だったから、景色は見えない。駆ける速さは風で感じるしかなかった。だが、どんどん後ろに退いていく水面下の珊瑚と、すぐにも手が届きそうに思えるほど迫る竜頭船は、陸の何倍もの速さが出ていることを、マンダに知らしめていた。碧色の珊瑚礁を越えると、急に波が高くなる。生きている砂丘のように、上下する波に足を取られながらも、マンダはいちばん沖に近い竜頭船に近づいた。大男のライは、水面を走り来るマンダを見て目を丸くした。だがすぐに気を取り直して、丸太のような腕をしきりに振って、海の向こうを指す。カダが引かれていったのはそっちだと、マンダは心得た。

竜頭船の舷側を擦るように走る。目が合っ

たライは、腰に提げた短剣を抜いた。天頂から射す陽光に、よく研がれた刃が輝く。ライが逆手に差し出した剣の柄を、マンダはしっかりと握った。頼んだぞと、後ろから男達の声がするのが聞こえる。

マンダは走り続けた。その駆ける先の真正面、あと二、三十歩ほどのところで、バアラが跳ねた。その背にはカダが突き立てた銛が刺さり、銛から伸びる縄は、ぴんと張り切っていた。縄の先には、カダが足を絡め取られて牽かれているはずだ。マンダはバアラに追いつこうと足を速めた。

縄が目の前に見えるところまで追いついた。その後ろ、波頭の中。

「おんじい！」

カダの姿を、見つけた。引き回されたせいで衣は脱げかけて、上半身に絡みついていた。気を失っているのかそうでないのかは、カダを弄ぶ波のせいでわからなかった。マンダはカダを呼び続けながら並んで走り、縄を掴も

うとする。だが、手は空を掴む。バアラの荒い動きで、縄は嵐に吹かれる枝のように、見境なく振り回されていた。何度も、近づいては遠ざかる。そのたびごとに、マンダは縄を必死に目で追った。足下をさらう波を何度も飛び越え、よろめきながら。バアラが小さく跳ねたとき、一瞬、縄が海面から高く離れ、ぴんと伸びた。いつときの間、静止したように見えたそれを、マンダは掴んで。ライから借りた右手の剣を、一閃した。張り詰めていた縄は矯められた木のように弾け、その勢いに放り出されるように、マンダは身を海面に叩きつけられた。鼻に入った塩水の痛みにも、思わず声を上げた。水靴を履いていても、体は水に浸かるのだと、マンダは知った。靴を履いた足だけが、水面に置いたように浮いていた。

竜頭船は、すぐにマンダを追ってやって来

た。ライはカダの身を引き上げ、船の上へと横たえた。ついでマンダの腕を掴むと、「驚いたぞ、よくやったな」と笑みをこぼした。マンダも誇らしげに、口を真一文字に結んでうなずいた。

「水を吐かせるんだ！」

ライの合図で、男達が、仰向けになったカダの胸を押す。何度か繰り返すと、カダの口元から海水があふれ出した。船の上は、安堵のため息に満たされた。

カダが目を開けると、ライは膝をついて、よく通る低い声で言った。

「シマオサ、大丈夫ですか」

眉間に皺を寄せたカダは、無言で首を縦に振った。

「縄が、絡んだのだな」

体を起こしたカダは、足首に刻まれた帯状の赤黒いあざを見て、起こったことをすっかり理解していた。「私も、焼きが回ったな」と、うつむいた。

「マンダが助けたのですよ」

「なんだと？」

ライの傍らには、ずぶぬれのマンダがいた。

後ろ手に手を組んで、カダの顔をにんまりと見つめていた。「どうやって」と口にしたカダは、マンダの足下に目を落とし、自分の孫が何を履いているのかを、理解した。

「おんじいは、水靴を履くなって言ってたけどさ」

マンダは水靴のつま先で、船板をとんとんと叩いた。

「役に立つだろ？　こうやって、おんじいのこと助けられたじゃないか。これで島のみんなも、水靴がいいものだって――」

「うつけ者！」

カダが発した怒声に、マンダはもちろんのこと、船上の皆が身をすくめた。

「掟破りだ！　ライ、こいつを牢へぶちこめ！」

理不尽とも思えるシマオサの言葉に、ライ

は、大柄な体を丸めた。

「しかし、マンダはシマオサの命を」

「生きながらえたことのほうが余程の恥ぞ！
銛縄に足を取られて落水するなど、そのまま
死んだ方がましだった！」

カダは誰よりも、誇りを重んじる男だった。
その誇りこそが、彼を齢六十にして、知恵と
力がともに求められるシマオサたらしめてい
る源でもあった。

「しかも、禁忌の水靴に救われるなど」
「待ってくれ、おんじい！ おれは……」

弁解しようとしたマンダの襟元を、カダは
ねじり上げるように掴んだ。その目には、収
まりそうもない怒りが宿っていた。息苦しさ
ゆえか、それとも恐ろしさゆえか、マンダに
はそれ以上、言葉が継げなかった。
カダはもう片方の手でマンダの頬を強く張
り、船板にマンダを放り出した。周りの者に
は、水靴を没収し、マンダを縛り上げるよう
命じた。船上の男達はシマオサとマンダの顔

を見比べながら、渋々と指図に従った。
マンダの頬を伝い、涙が落ちる。水靴のつ
ややかな表面に、その涙滴ははらりと受け流
された。

格子窓の隙間から、マンダは月を眺めた。
おとといの夜の満月は、少し欠けた姿で中天
に浮かんでいた。あの月はこのまま欠けてな
くなっていくのだと、マンダは思う。
マンダは、カダの下知によって、シマオサ
の家——つまりはマンダの家でもあるが——、
その裏手にある座敷牢へと閉じ込められてい
た。藺草を編んだ畳は、ところどころはげて
いる上に、かびくさい臭いを放っていた。月
明かりの差し込む小さな窓のほかには、閉じ
られた木の扉に開いた差し入れ口だけが、外
との接点であった。
マンダは牢に放り込まれてから、ずっと泣
き通しだった。水靴を履いていたことが、そ

んなに悪いことなのだろうか。人の命も救えるものなのに、なぜ禁じるのか。まったく分からなかった。

カダに張られた頬が痛む。祖父が、自分に對してこんな仕打ちをしたことに、強い衝撃を受けていた。カダは厳格な人ではあった。だが、わけも聞かずに手を上げることなど、いままでに一度もなかった。掟を破ったのは悪いことなのかもしれない、だがそれを通り越して、おんじいに憎まれてしまったのだろうか。マンダにはわからなかった。

「マンダ」
分厚い木扉の向こうから、優しげな声がした。

「おんばあ」
マンダは、扉にすがるように両手をついた。頑丈な木の扉は、揺るぎもなかった。

「なあ、おんばあ、ここから出してくれよ。おんじいに話したいんだ」

「かわいそうだけれど、わたしにもどうにも

できないのよ。わたしも見ていたわ。あなたがあの人を助けてくれたのは、たしかなのね」

祖母のカララは、深く息を吐いた。扉の向こうで、祖母がうなだれているのが、マンダにはわかった。

「いま、長老衆の集まりが開かれているわ。あなたの処し方を話し合うために」

まさに隣の建物で、マンダの掟破りの処し方を決めているのだった。

「：：：どうなるのかな、おれ」

「わからない。けれど、集まりは二つに割れているそうよ。あの人を救ったのだから見逃すべきだという意見と、いかなる事情でも掟破りは厳しく罰しなくてはならない、というものと」

おんじいが見せた怒りから思うと、おんじいは罰するほうなのだろうか。でも、そうだとしたら、なぜ水靴を使うことが、そんなにいけないことなのだろうかと、マンダは思う。

「おんばあ、おんじいはどうして、水靴をだめだというんだ」

「あの人は、怖がっているのよ」

怖がっている、という言葉を、マンダは意外に感じる。厳しく強い祖父には、似合わない表現だった。

「水靴は、島を島でなくしてしまうと、そう話していた」

「島を島で、なくしてしまう？」

「島は、海に囲まれているでしょう。大陸のように、人が自由に行き来できるわけではないわ。その分、島は大陸みたいに栄えているわけではないわ」

島を訪れた隊商たちを、マンダは思い出していた。彼らが持ってきていた珍しい品々は、みな大陸で作られたものだと思っていた。

「それがいやだという人も少なからずいることは、あの人もわかっています」

「おれ、この島は好きだ。だけど、もっといろいろなものがあつたらいいなと、おれも思う」

「そうね、それは自然なこと。だけどあの人は、島が島であることに、こだわっているの」
カララは語り続ける。

「カダもね、水靴を履いていたことがあるの。若い頃、北の大島との約定で、兵として島を離れたときに。幸い、その三年の間は平和だった。大きな戦争も起こらなかったわ。そして兵役が終わったあと、あの人は水靴をもらって、島々を渡り歩いていた。初めて見た外の世界に惹かれて、移り住む場所を探すためだったそうよ。あの人も、この靴があれば島を出て行けると、そう思っていたころがあった」

えっ、とマンダは驚きの声を上げた。祖父がかつて、兵として北の大島に赴いていた話は知っていた。だが、島を離れようとしたころがあったなんて、いままでに聞かされたことがなかった。
「けれど、水靴のある島々では、人々が豊かな島に去ってしまったたり、由緒あるしきたり

が失われてしまったり、水靴を履いた賊に村を焼かれたりと、そんなことが起きていた。水靴で島同士や大島、大陸との行き来が自由になったせいで、海に囲まれた島なのに、広い陸のあるところと同じようなことが、起こってしまっている、と」

マンダが考え込んだ様子で鼻を鳴らす音を聞き、カララはしばらく間を置いた。

「あの人は結局、島を出てから五年経って、やっと戻ってきた。この島のあたりにはまだ、水靴は伝わっていなかった。昔のまま変わらない島を見て、ほっとしたと言っていたわ。他の島々で起きていたようなことがないように、このままを守らなくてはならないと、そう思ったって」

マンダは、おんじいが見てきたことの原因は水靴だけのせいなのかと、疑問に思った。

他にも、島の間を行き来する方法はある。

「船があれば、同じことなんじゃないか」

「船で行けるといふことと、自らの足で歩い

て行けるといふことは違ふと、あの人は言つていたわ。歩けるといふことは、行きたいといふ思いさえあれば行けるといふことなのだから――

自分の足で歩けるといふことに、意味がある。マンダは、夜の海で見た景色や、バアラ獲りのときのことを思い出していた。海の上を自分で歩かなければ、きっと見られなかった景色を。そして、水靴を履いて駆け抜ければ、助けられなかったかもしれない、祖父のことを。

だから、おんじいは水靴を禁じたつていうのか。でも。

「……どこかへ行きたいつていう気持ちを、どうして禁じなくちゃいけないんだろう――」

マンダは、思ったままを口にした。カララは、彼の問いかけに答えることができないまま、いつまでも沈黙が続いた。

牢の扉を隔てて、マンダをカララは押し黙

ったままだった。

そのとき牢小屋の入り口から、誰かが入ってくる気配がした。祖母が息をのむ音を、マ
ンダははっきりと聞いた。

おんじいが、来たのか。

幾人かの足音が、牢の扉近くまで歩み寄つてくる。マンダは差し入れ口から外をのぞき見た。カダをはじめとした、長老衆が揃っていた。

「マンダよ」

口を固く結んだまま、マンダは祖父の声を聞いていた。

「長老衆の決定だ。心して聞け」

「……はい」

唾を飲み込む音が、耳の中いっぱいに響いた。

「お前は、十五の堅き掟のひとつ、水靴の禁に背いた。その咎については、長老の間でも議論があった。意見が割れたゆえ、シマオサたる私の裁定で、定めに従いお前を島からの

追放に処すことと決めた。明朝、夜明けとともに、キマの浜から発つことを命じる。なお、追放に際して、誰であろうと見送りに出向いてはならない。以上だ―

カララのうろたえる声が出た。長老衆も下を向いたまま、目を伏せている者がほとんどだった。マンダは掟に反したとはいえ、シマオサの命を救った。しかも彼はまだ、成人していない子どもだった。それを追放するとうことは、誰にとっても心苦しいことであつた。

だが、マンダは落ち着き払っていた。あぐらをかいたまま静かに目を閉じて、祖父の言葉を受け止めていた。

いつもは厳しい祖父の声音、それが今は少しだけ震えていたことが、マンダにはよくわかっていったから。

まだ星々が、薄紫色をした空に、かすかに

残っている頃。

マンダは、彼を護送するために行った。男二人と、キマの浜に向けて歩いてきた。人はマンダを縛めた縄を握っていた。もう一人は、バアラ獲りのときに彼とカダを船へと引き上げた、ライだった。ライは、三日分の水と食料を詰めた袋を、肩から提げていた。マンダは二人と言葉を交わすこともなく、ただ前だけを見つめて、砂浜への道を歩いた。彼の歩みは、強いられたものではなく、自らの意思に満ちているようだった。

夜明けの浜は、潮騒に満ちていた。キマの浜には珊瑚礁がない。汀から先には、深い青色の海が、水平線まで続いていた。砂浜には、マンダが乗るための小舟が一艘、置かれていた。

マンダを縛っていた縄は解かれた。縄持ちの男は、手際よく縄を丸めて結うと、すぐに背を向けて去っていった。ライは小舟の中に荷物を置くと、マンダの脇を通り過ぎながら、

無言のまま彼に何かを握らせた。

マンダは、乾いた感触を掌中に覚えた。振り返ると、ライのまっすぐの足跡が、砂浜に残されていた。彼の背中は、いつも通り堂々としていた。

折りたたまれた紙。

手紙だ。

マンダは、ある程度文字が読めた。カダが小さい頃から努めて教え込んでいたおかげだった。もちろん、昔に大陸でしたためられた難解な詩文などは、字を読むことすらできなかったが、島同士の間でやりとりされる文ぐらいは、彼にも理解できた。ギンラーの大葉ほどの大きさをした四つ折りの紙を、マンダは広げた。

キマの浜から、真昼の太陽を背にして舟で一日ほどのところに、ママザの島がある。ママザのシマオサを訪ねよ。彼は必ず力になっ

てくれる。

どこまでも広がる海を往け。水靴がもたらすものをその目で見よ。望むところまで歩き続ける。

シマオサの裁定が意味を持つのは、その命あるあいだのみ。

いつか、シマオサが没した報せに触れたときは、留まるも戻るも、お前の自由だ。

息災であれ。

手紙には、書き手の名はなかった。

けれど、誰が書いたのか、マンダにはよくわかっていた。

手紙の中身をすっかり心に刻むと、目頭を指で押さえつけ、涙を堪えた。

小舟の荷物の中に、麻袋を見つけた。袋を開けると、黒く艶やかに光る水靴があった。取り上げられたはずの水靴が、また彼の手に

戻ってきた。取り出した靴を履き、紐を編み上げる。この靴が、これから先の、長い長い旅の相棒になるのだ。頼るような、励ますような思いをこめて、彼は紐をしつかりと結んだ。

荷物を乗せた舟の舳先に結んである縄を引いて、マンダは水の上に歩を進めた。キマの浜辺の延びる先、真東の海から、橙色の太陽が顔を見せた。灰青色の薄雲が、その光をやわらげていた。日の昇る方角は、ニライがあるという方角だ。あの太陽に向かっていつまでも歩き続ければ、ニライへとたどりつくのだろうかと、マンダはふと思った。だがすぐに首を振って、考えを払った。

空にはもう、星はひとつも瞬いていなかった。

さざ波の上を、マンダはゆつくりと歩いて行く。足下の海は深く暗い色をして、海面の下はよく見えない。

マンダは、振り返らずに行こうと決めていた。振り向けば、思いが島に引かれてしまうはずだから。けれど、急な向かい風に吹かれ、握ったままだった手紙が飛ばされてしまった。思わず、マンダは手を伸ばし、手紙が飛んでいったほうを目で追った。

ふと、海の際からそそり立つ岬が、彼の目に映った。

その岬の天辺。

佇む老人の姿を、そこに見た。

堪えていたはずの涙が、溢れ出した。